

# 『源氏物語』朝顔姫君及び朝顔の巻を巡って

山上 義実

朝顔姫君とは、桐壺帝の弟式部卿宮の姫君である。帚木の巻に「式

部卿宮の姫君に朝顔奉りたまひし歌などを、すこし頬ゆがめて語るも聞こゆ。」(第一巻95頁<sup>1)</sup>)と、光源氏の言い寄る女性の一人として登場する。その後、葵、賢木、朝顔、乙女、梅枝、若菜上、若菜下の各巻に、その折々の光源氏との関わりがごく簡単に物語られる。二人の關係は、一遍の物語を形成する程の内容を持つとまでは言えないが、朝顔の巻という彼女の名前を冠する一巻が存在し、終始光源氏の心の一隅を捉え物語に不思議な存在感を持つ女性である。本論は、朝顔姫君及び朝顔の巻の物語全体における意味について考えてみようとするものである。

## 一

朝顔姫君は、従来六条御息所と同様な境遇に陥ることを厭い、光源氏を賛美し憧れる世の多くの女性たちと等し並みに扱われることを潔しとせず、再三に渡る光源氏の求愛を拒み続ける女性として説明される。今改めて朝顔姫君関係の記事を読み直してみてもまさにその通りであり、新たに付け加えるべき点として何も無い。朝顔姫君は、誇り高く光源氏の求愛を拒み続け、『源氏物語』において主人公光源氏の魅力に取り込まれることのない唯一の女性として特筆されるべきである。

う。

とはいっても、朝顔姫君は、光源氏との交流を一切受け付けないというのではない。彼の美貌と才能はよく理解し、むしろ折節に受け取る消息によって他に抜き出た存在であることを理解するが故に逆によくの愛人の一人にはなりたくないと思うのであって、遠く離れての手紙の往来には素直に応じている。

姫君は、年ごろ聞こえわたりたまふ御心ばへの世の人に似ぬを、なのめならむにてだにあり、ましてかうしもいかで、と御心とまりけり。いとど近くて見えむまでは思しよらず。(葵の巻 第二巻26頁)

光源氏は、そうした彼女の対応に好意を感じ、間遠ではあるものの折節の消息は絶えない。葵上を亡くした悲傷の中の遣り取りにおいては、朝顔姫君に理想的な女性のあり方を感じ、紫上を教育する上で一つの目標にしている。

つれなながら、さるべきをりをりのあはれを過ぐしたまはぬ、これこそかたみに情も見はつべきわざなれ、なほゆゑつきよし過ぎて、人目に見ゆばかりなるは、あまりの難も出で来けり、対の姫君をさは生ほしたてじ、と思す。(葵の巻 第二巻58頁)

光源氏は、朝顔姫君が齋院に立った後も齋院の御所にまで消息を送り続け、弘徽殿女御側の光源氏批難の一つにされている。こうした二

人の交流は、晩年まで引き続き、彼女の出家にあたって光源氏はこの上ない愛情と寂寥とを感じている。

なべての世のことにても、はかなくものを言ひかはし、時々によせて、あはれをも知り、ゆゑをも過ぐさず、よそながらの睦びかはしつべき人は、齋院とこの君とこそは残りありつるを、かくみな背きはてて、齋院、はた、いみじう勤めて、紛れなく行ひにしみたまひにたなり。なほ、ここの人のありさまを聞き見る中に、深く思ふさまに、さすがになつかしきことの、かの人の御なずらひにだにもあらざりけるかな。(若菜下の巻 第四卷263頁)

光源氏にとって朝顔姫君は、四季折節の情趣をよく理解し、遠く離れていても親しく遣り取りできる数少ない女性であり、思慮深く優雅な点では他には得難い女性であった。結局、二人は男女の契りのないままに長く交流を続け、光源氏にとって彼女はこの上ない折節の心の慰めであったといえよう。

『源氏物語』は、若菜上の巻以降男女の愛の儂さが描かれ、心の平安を求めて、仏道に救済を求める女性の姿が多く描かれる。作者は、結婚という形での女性の幸福には絶望的な思いを抱いていたようにも読み取れ、男女間の愛ではなくそれとは別な形での愛情によって心を通わせる男女の姿が描かれていると筆者には読み取れる<sup>②</sup>。とすると、朝顔姫君は、作者が考える苦悩を回避して生きる女性の一つの姿を、物語の始まりからして既に示していると言えるのであろうか。恐らく、否であろう。朝顔姫君を、晩年の紫上や大君、浮舟と同様に読み取ることが、やはり無理があるであろう。朝顔姫君は、その人生全体が掘り下げて描かれることはない。光源氏と関わりのある一面のみが描かれていくだけである。

朝顔の巻にしても、朝顔という名前を巻名にしていながらも、必ずしも彼女を中心とする巻であるとはいえないようである。確かに朝顔

姫君を求めて桃園宮邸を訪れる場面が二箇所あるが、いずれも彼女との対面の前に女五宮との対面の様子が長々と語られ、源典侍の登場などもあって、物語の来し方を振り返り今ある光源氏の状況を静かに見つめ直すといった内容が、求婚譚と同等の重みを持つといえる。その他本巻には、朝顔姫君と光源氏が結婚した場合のことを考えて深刻に心を悩ます紫上や、その紫上を慰めようと童女たちの「雪まろばし」を見ながら問わず語りに過去の女性たちを批評する光源氏、紫上を前に自らを話題にされたことを契機に夢枕に立って恨み言を言う藤壺、死後の世界において罪の苦患に苦しむ藤壺の姿に強い衝撃を受け、暗澹とした思いで阿弥陀仏を念じる光源氏の様子などが物語られている。いづれかというに、紫上や藤壺に関する記事の方がむしろ読者にとって印象深い内容となっているといえよう。朝顔姫君の物語は、次の乙女の巻の冒頭にも見られる。女五宮の熱心な勧めにも従わず、「いまさらにまた世になびきはべらんもいとつきなきことになむ」(乙女の巻 第三卷19頁)と結婚拒否の思念の固い朝顔姫君と、「わが心を尽くし、あはれを見えきこえて、人の御気色のうちもゆるばむほどをこそ待ちわたりたまへ、さやうにあながちなるさまに、御心やぶりにきこえんなどは思さざるべし。」(同上20頁)と、あくまで姫君の気持を尊重し力づくで思いを遂げようとはしない光源氏の姿が描かれる。そこには二人の関係の最終的な形が物語られているといえよう。藤壺を慕う光源氏の絶望的な悲しみの深い余韻の中で朝顔の巻を閉じ、二人の関係の最終的な締め括りは次の乙女の巻でなされていること自体、本巻は、朝顔姫君への求婚の経緯を第一の目的とするものでないことを示しているといえよう。

朝顔姫君は、光源氏を中心とする物語の中において必要とされる範囲内でのみ描かれ、作者の問題意識を反映したある主題を担って描かれるということはない。折節の消息は取り交わしつつも決して結婚は

しないという彼女のあり方は、作者の主観的な意図のもとに描かれたのではなく、光源氏のような男性に対応する女性の現実世界においてあり得る一つの形であったと同時に、それ以上に光源氏と紫上を相思相愛の理想的な一对の夫婦として描いていくための物語の要請によるものであったであろう。朝顔姫君の結婚拒否は、多くの妻妾たちを代表する形で六条院に入る花散里が早くより光源氏との男女の関係は絶えていたとされるのと同様に、紫上の女主人公としての位置を確保するための方便であったと思われる。物語の一方便として描かれる男女が男女の愛とは別な愛情で心を通わせる花散里や朝顔姫君のようなあり方が、やがて物語が進行し紫上や大君、浮舟の人生に寄り添って女性の人生のあり様を追求しようとした時に、別のより大きな意味をもって描き出されてくるといえるのではないだろうか。

## 二

さて、朝顔姫君が物語の主題を担う程の存在ではないとした場合、朝顔の巻は一体何を語ろうとしたものであろうか。この点に関しては既に吉岡曠氏が「鴛鴦のうきね」という論文の中で詳細に整理しているように、森藤侃子氏は紫上を揺さぶろうとしたものであると言い、秋山虔氏はその森藤氏の説を踏まえて、紫上の女主人公としての据え直しをなそうとしたものであると言う。これに対し、清水好子氏はこの巻の第一主題を藤壺への鎮魂歌と読み取る。一方、吉岡氏の論文では言及されていないが、これらの論文に先立って池田龜鑑氏は「朝顔の巻は、構想的には、薄雲の巻の中に位置してもよい巻である。(中略) 主要テーマは、朝顔の君に対する昔の恋が再燃してくるといふこと、それにつけ紫上の不安と嫉妬が新しく家庭生活をおびやかすといふこと、この二点にあるといつてよい。」と言い、また、「最後に藤

壺の亡霊を弔がき、さむざむとした雰囲気の中で、この巻をこちた構想は見事である。(中略) 藤壺物語の最後の巻と見るべきであろう。」とも言う。こうした様々な見解の中で池田氏の説に最も共感を覚える。つまり、朝顔の巻は、紫上の揺さぶりや藤壺への鎮魂を目的として書かれたものではなく、第一の動機は朝顔姫君への求婚にあり、それを描くことによって必然的に想定される紫上の不安・動揺に筆が及び、最後は当時の光源氏の心の状態を反映して藤壺鎮魂となったものと筆者には読み取れる。総じて、藤壺を亡くした後の光源氏のあり様を描いた巻であるといえよう。

藤壺と朝顔姫君との深い関連については、森藤侃子氏の鋭い指摘がある。氏は、帚木の巻の物語への初登場の際、朝顔姫君は「光源氏が「胸つぶれて」思った藤壺の代わりに、人の耳目をひいていた」こと、賢木の巻で右大臣方による光源氏追放の理由の一つに朝顔斎院への犯しがあげられていたことを踏まえ、朝顔姫君は「源氏と藤壺の秘密を(中略)世間の目から外し、あるいは隠蔽する役割を負って」創造され、「本来藤壺と盾の表裏の関係にあり、当初から藤壺に付随し、その代行者としての役割を負って創出された」とみていいのではなからうか」と言う。傾聴すべき卓見であろう。

さらに、朝顔姫君は、よく考えてみると当初から物語に登場する上流貴婦人の中にあつて光源氏の結婚相手としてもっとも相応しい女性であったといえよう。葵上亡き後、その地位を襲うもっとも適当な女性には、東宮の未亡人である六条御息所ではなく、家柄も良くまだ結婚していない朝顔姫君であつたといえる。彼女は、葵上の死の二年後賀茂の斎院となつて神域に入り、光源氏の手の及ばない所となるが、それでもなお折節の二人の往来は絶えなかつたという。その彼女が、父式部卿宮の薨去により斎院の地位を退下したというのである。「斎院は御服にておりゐたまひにきかし。大臣、例の思しそめつること絶え

ぬ御癖にて、御とぶらひなどいとしげう聞こえたまふ。」(朝顔の巻 第二巻469頁)と、光源氏の求愛が語られるのも自然な成り行きであるといえよう。

物語全体の流れは、明石の地から政界に復帰し、徐々に政権基盤を整え、明石姫君を二条院の紫上のもとに引き取り、夜居の僧都の奏上により冷泉帝が自らの出生の秘密を知るなど、更なる栄華の獲得に向かおうという所である。薄雲の巻の太政大臣や藤壺の死には光源氏の一つの時代の終わりが感じられ、巻末近くに描かれる光源氏と斎宮の女御との対座の場面には、後の六条院造宮や玉鬘物語の展開を感じさせるものがある。乙女の巻や玉鬘の巻から始まる次の段階の物語、つまり紫上を女主人公にする六条院における栄華の物語を語り進めるに先立って、社会的・客観的にはもともと正妻たるに相応しい朝顔姫君との関係に結着をつけておくことがどうしても必要だったのでなかろうか。<sup>⑩</sup>

### 三

藤壺の死に関連して語り始められる朝顔姫君への求婚であるが、求婚譚そのものとしては、朝顔姫君の結婚拒否の意志が固く、何ら新たな展開を示すものではない。むしろ、そのことによって引き起こされる紫上の不安・動揺の方が読者の興味を惹きつける。特に、この巻での紫上の姿と後の若菜上の巻における女三宮降嫁の折のそれが極めて類似する点に注目される。秋山虔氏や今井源衛氏は、「この「槿」巻における紫上像には後の「若菜」の巻に至って彼女がになわせられるであろう問題がすでに提起されている。」<sup>⑪</sup>とか、「その後年の紫上の姿の前兆がはっきりと刻印されている事を見逃す事はできないであろう。」<sup>⑫</sup>と言う。確かに、後の物語の伏線かと思わざるを得ない程に両

者はよく似ている。しかし、伏線とした場合になぜこの時期にその伏線を置いたのか、またどうしてこうもよく似た物語を同じように繰り返す必要があったのか、不思議に思われる。

こうした疑問を念頭に、二つの場面を改めて読み比べてみると、よく似ている中にも大きな違いがあることに気付く。身分、世評が高く、自分以上により正妻たるに相応しい女性の出現に、光源氏の寵愛の衰えを予測し世間体を考えて、深く動揺する紫上の姿は同じであり、表現までも酷似している。

(1) 御心など移りなばはしたなくもあべいかな。年ごろの御もてなしなどは立ち並ぶ方なくさすがにならひて、人に押し消たれむことなど、人知れず思し嘆かる。(中略) よろしきことこそ、うち怨も出だしたまはず。(朝顔の巻 第二巻478〜479頁)

(2) かかりけることもありける世をうらなくて過ぐしけるよと、思ひつづけて臥したまへけり。(同上 480頁)

(3) 今はさりとものみわが身を思ひあがり、うらなくて過ぐしける世の、人笑へならむことを下には思ひつづけたまへど、いとおいらかにのみもてなしたまへり。(若菜上の巻 第四巻54頁)

(4) 年ごろ、さもやあらむと思ひしことどもも、今はとのみもて離れたまひつつ、さらばかくにこそはと、うちとけゆく末に、ありありて、かく世の聞き耳もなのめならぬことの出で来ぬるよ、思ひ定むべき世のありさまにもあらざりければ、今より後もうしろめたくぞ思しなりぬる。(同上 65〜66頁)

(1)(2)は朝顔の巻の記事であり、(3)(4)は若菜上の巻の叙述である。内容的には勿論のこと、文章表現の上でもごく近いものがあるといえよう。

一方、また違いも見られる。一つには紫上の姿である。若菜上の巻

の女三宮降嫁では、(3)(4)にも見られるように、将来の不安を思い、世間体を氣遣って深く思い悩みながらも、表面は平静を装い決して外に出そうとしない。女房や世間に対してばかりでなく光源氏にも本音は見せず、隔絶した孤独の中で苦悩に耐え、やがて出家を切願するに到る。朝顔の巻の紫上は、「まめやかにつらしと思せば、色にも出だしたまはず」といわれながらも、恋文の執筆に余念のない光源氏を見ては「気色をだにかすめたまへかし」(朝顔の巻 第二巻478頁)と嫉妬の念を燃やし、桃園宮邸を訪れようと暇乞いする光源氏に若君をあやしなから見向きもせず「馴れゆくこそげにうきこと多かりけれ」(同上 480頁)と怨み言を投げかける。夜離れが重なる時には光源氏の目の前で涙を流すこともあり、光源氏の慰めと戒めに拗ねた態度を取りもする。

二条院に夜離れ重ねたまふを、女君は戯れにくくのみ思す。忍びたまへど、いかがうちこぼるるをりもなからむ。(朝顔の巻 第二巻488頁)

まろがれたる御額髪ひきつくりひたまへど、いよいよ背きてものも聞こえたまはず。(同上 489頁)

朝顔の巻の紫上には、女三宮降嫁の折には見られない女性の生な感情の素直な発露が見られる。

もう一つの大きな違いは、光源氏の紫上に対する氣遣いである。女三宮降嫁の折には、朱雀院の要請を受け入れた直後から紫上のことを思いあれこれと思い悩んでいる。

このことをいかに思さむ、わが心はつゆも変わるまじく、さることあらんにつけては、なかなかいとど深さこそまさらめ、見定めたまはざらむほど、いかに思ひ疑ひたまはむ、など、やすからず思さる。(若菜上の巻 第四巻51頁)

新婚三日目の夜物思いに沈む紫上の様子に「などで、よろづのこと

ありとも、また人をば並べて見るべきぞ、あだあだしく心弱くなりおきにけるわが怠りに、かかることも出で来るぞかし」(同上 63頁64頁)と涙を流して反省する。紫上の心の痛みを我がこととし、これまでのように素直に寄り添ってこない紫上の態度に深く心を痛める。女三宮降嫁による不幸は、紫上ばかりでなく、紫上の様子を見て心を痛める光源氏のものでもあったのである。それに対し、朝顔の巻での光源氏は、「馴れゆくこそげにうきこと多かりけれ」と、拗ねた態度で恨み言を言う紫上を目の前にしても、振り切って外出する。紫上の心痛を十分承知しながらもなお朝顔姫君への求婚を続けるのである。相手の拒絶が固く真実裏切るまでには至っていないせいであろうか、紫上に向う光源氏には余裕があり、いかにも子供をあやすかのように宥め賺している。

おとなびたまひためれど、まだいと思ひやりもなく、人の心も見知らぬさまにもしたまふこそらうたけれ(中略)いといたく若びたまへるは誰がならはしきこえたるぞ(朝顔の巻 第二巻489頁)

特に、藤壺の夢にうなされ、紫上によって起こされた時の光源氏には注目される。

御答へ聞こゆと思すに、おそはるる心地して、女君の「こは。などかくは」とのたまふにおどろきて、いみじく口惜しく、胸のおきどころなく騒げば、おさへて、涙も流れ出でにけり。今もいみじく濡らし添へたまふ。女君、いかなることにかと思すに、うちもみじろかで臥したまへり。(同上 495頁)

夢にうなされ目覚めた後も呆然としてただ涙を流すだけの光源氏は、すぐ側で心配そうに見つめる紫上に何の説明もしていない。紫上の方も、光源氏の様子にただならぬ氣配を感じたことであろうが、物語はその後の二人の遣り取りを一切語ろうとしない。藤壺のことを思い所々

に御誦経をさせ、自らも一心に阿弥陀仏を念じる光源氏の姿を描くだけである。この当時光源氏の心をもっとも強く深く捉えていたのはやはり藤壺であり、思いがけずその藤壺の苦患に苛まれ自分を恨む姿に直面して衝撃を受け、紫上を思いやる余裕もなかったというのであるうか。朝顔の巻は、藤壺を追慕し、悲嘆に沈む光源氏の姿を描き、深い余情を残して終わる。その意味において、本巻の主題を藤壺鎮魂にあるとする見解も十分に首肯し得るものではないえよう。

朝顔の巻における紫上の不安・動揺は、朝顔姫君の結婚拒否の強い姿勢によって間もなく解消されるが、若菜上の巻における女三宮降嫁から脱却し、出家を望むに到る。それは、光源氏にとっても、柏木と女三宮の裏切り以上に人生の根幹に関わる大きな問題であった。つまり、若菜上の巻においては、朝顔の巻に見られた二人の間柄における問題が、より深化発展した形で改めて描き直されていると見ることができるであろう。

#### 四

近年『源氏物語』は、『日本古典文学大辞典』<sup>13)</sup>の解説にも見られるように、第一部(桐壺の巻から藤裏葉の巻までの三十三卷)、第二部(若菜上の巻から幻の巻までの八卷)、第三部(匂宮の巻から夢浮橋の巻までの十三卷)の三部作として把握され、主題も物語の進行と共に変化、発展していると説明されることが多い。さらに、武田宗俊氏は、第一部を紫上系十七帖と玉鬘系十六帖に分け、前者を物語の最初の形態とし、これに後者が後記挿入されたものと説明する<sup>14)</sup>。主題が変化している作品を一文学作品として認めることができるかどうかという疑問がない訳ではないが、物語の実態は、確かに英雄光源氏の生涯を語

るといふ面と、光源氏と関わりのある女性たちのそれぞれの姿を語るという二面があり、第二部、第三部へと物語が進行するにつれて後者への興味・関心が徐々に強まっているといえよう。宇治十帖は、明らかに光源氏の問題を受け継ぐ薫の物語である以上に、紫上の人生の問題を引き継ぐ大君、浮舟の物語であるといえる。

主題が変化しているという点に関し、筆者は、物語執筆の途中に大きな構想の変化がなされた故ではなからうかと考えている。一つは、玉鬘系巻々の後記挿入であり、もう一つは紫上の役割の変化である。『源氏物語』は、当初一人の英雄の波瀾に富んだ生涯の物語として出発したであろう。そして、それは貴種流離譚を踏まえた出世成功の物語と若き日の罪への応報による晩年の悲劇とを基本の構想とするものであったろうと思われる。ところが、物語を語り進めていく中で、一人の英雄の造形と面白い筋の展開だけではなく、人間の「まこと」、人生の「まこと」をも描くような物語にしたいと思うようになったのではないだろうか。詳細は玉鬘系巻々の後記挿入について考える別稿に譲りたいが、語られた物語は、藤壺や葵上の描かれ方、冷泉帝の誕生を巡る物語など、主人公を中心とするあまり、あるいは筋の展開を重視するあまりに、人間の真実、人生の真実に迫り切れていない点に作者自身不満を感じ、玉鬘系の巻々を挿入することによってその修正を図ったのではなからうか。

紫上の役割も、物語の書き始められた当初は、夕霧と過ちを犯して子供を出産し、光源氏に罪の応報を与えるというものだったであろう。桐壺の実子である光源氏が、父の最愛の妻である藤壺と通じ子供を儲けるという罪に正しく照応するのは、晩年兄朱雀院の要請によって迎えたそれ程愛情の感じない妻女三宮に親友の息子柏木が通じるという形よりも、実子夕霧が最愛の妻紫上に通じ子供ができるというものである。その方が光源氏に与える衝撃も計り知れず、罪と応報の物語と

してより統一感のある物語になっていたであろうと思われる。現行の物語は、光源氏の晩年の悲劇の内容が女三宮降嫁による紫上の苦悩、夫婦間の亀裂の物語と密通事件とに二分され、もはや罪と応報の物語とだけはいえないものになっている。紫上の死が光源氏の人生の終わりでもあると語られていることが端的に示すように、光源氏にとって、紫上の苦悩と心の離反及び病が、柏木と女三宮の裏切り以上に大きな悲劇であったといえよう。

当初予定されていた紫上と夕霧の密通事件が、なぜ女三宮と柏木との関係に変更になったのか。それは、光源氏だけを中心とする英雄の生涯を語る物語に飽き足りなさを感じ、登場人物それぞれを現実生きる人間として内面から語り、より人間の「まこと」、人生の「まこと」に迫る物語を語りたかった故ではなからうか。夕霧と罪を犯して苦悩する物語以上に、今見られる物語のような一夫多妻制のもとにおける女性のあり様を見つめ、あるべき生を求めて苦悩する紫上の物語の方が作者の描きたい物語であり、より現実的な女性の実態に迫るものと考えられたものであろう。そして、そうした新たな構想が明確になったのが、朝顔の巻執筆の前後ではなかったかと思われるのである。つまり、藤壺の死に因む余波として、折しも父の死によって齋院を退下し結婚の障害が除かれた朝顔姫君への光源氏の熱心な求婚がなされ、そこに当然予想される紫上の不安・動揺する物語を構想し、描いていく中で、若菜上の巻以降の紫上の物語が具体的にイメージされていったのではないかと思われるのである。

紫上の当初の役割は夕霧と密通して子供を儲ける点にあったろうと考える筆者にとって、朝顔の巻と若菜上の巻の紫上を巡る物語が、一部表現までも同じくする極めて類似した内容となっていることの説明としては、前者が後者の伏線として描かれたとするよりも、後者は前者の深化・発展した物語として改めて描き直されたものであると見る

方が納得がいく。罪と応報の物語の構想の変更と玉臺系巻々の挿入とは作者の同じ物語観から発しており、両者相伴って同じ時期に、つまり朝顔の巻の執筆前後になされていたのではなからうか。朝顔姫君が物語の当初から登場し、その名を冠した巻がありながらも、これといった出番を持ち得ないのは、夕霧がそうであったと同様に、物語全体の構想の変更によるものであったと考えることもできるのではなからうか。

以上、朝顔の巻の物語全体における意味を考えることが、『源氏物語』の主題・構想の変動に及ぶ頗る大胆な仮説になってしまった。論証不能の単なる思い付きのようではあるが、筆者としては、物語全体の動向に関する一つの解釈のつもりである。大方の御叱正を乞いたい。

#### 注

(1) 『源氏物語』本文の引用は、新編日本古典文学全集『源氏物語』(小学館刊)により、巻数と頁数を記した。

(2) 拙稿『源氏物語』宇治の大君像をめぐって』(『文芸研究』第11集、昭和63年)、『源氏物語』における愛のかたち―宇治の大君論補遺』(菊田茂男教授退官記念日本文芸の潮流)おうふう、平成6年)、『源氏物語』浮舟の行方―宇治十帖結末に関する一解釈―(『文芸研究』第145集、平成10年)参照。

(3) 花散里に関しては、拙稿『源氏物語』における愛のかたち―花散里の場合』(『金城学院大学論集』国文学編第46号(平成16年)参照。

(4) 吉岡曠『鴛鴦のうきね―朝顔巻の光源氏夫妻』(『中古文学』第十三号(昭和49年5月)、第十四号(昭和49年10月)掲載。後に『作者のいる風景 古典文学論』(笠間書院、平成14年)に所載)参照。

(5) 森藤侃子『権斎院をめぐって』(都立大学『人文学報』三二号(昭和38

年)に掲載。後に『源氏物語―女たちの宿世―』(桜楓社、昭和59年)に掲載。参照。

(6) 秋山虔「紫上の変貌」(『源氏物語の世界―その方法と達成―』(東京大学出版会、昭和39年)参照。

(7) 清水好子『源氏の女君 増補版』(はなわ書房、昭和42年)第一部8章「藤壺鎮魂歌」参照。なお、吉岡曠前掲論文では、永井和子氏も松尾聡・永井和子校註『源氏物語・朝顔』の解説の中で清水好子氏と同様に藤壺を中心に捉えていると言う。

(8) 池田亀鑑『新講源氏物語』(至文堂、昭和26年)朝顔の巻の項参照。

(9) 森藤侃子「權卷の構想」(秋山虔・木村正中・清水好子編『源氏物語の世界』第4集 有斐閣、昭和55年)掲載。後に『源氏物語―女たちの宿世―』(所載)参照。

(10) 森藤侃子氏は、「權齋院をめぐる」における朝顔の巻は紫上に揺さぶりをかけるために描かれたとする自説に対し、後の「權卷の構想」においては「今それを否定するわけではないが、修正あるいは、複数の視点の必要を感じている。少なくとも紫上と同等あるいはそれ以上に、藤壺と齋院の関係を考慮に入れないと総体としての朝顔巻はとけないのではないかと思う。」と言い、「朝顔巻の事件は、むしろ藤壺死去をうけて源氏の妻妾の序列化を、この時期に整備・策定し、六条院創出に備える事であったのではなからうか。」と言う。

(11) 秋山虔前掲論文参照。

(12) 今井源衛「紫上」(山岸徳平・岡一男監修『源氏物語講座』第三巻、有精堂、昭和46年)参照。

(13) 『日本古典文学大辞典』(岩波書店、昭和59年)第二卷「源氏物語」の項参照。

(14) 武田宗俊「源氏物語の最初の形態」(『文学』昭和25年に掲載。後に『源氏物語の研究』(岩波書店、昭和29年所載)参照。

(15) 夕霧に関しては、拙稿「源氏物語」夕霧の物語試論」(『秋田語文』第3号 昭和48年)参照。